

日本の明日へ 若い力がここにある



土木統括部 工事一課長 神谷朝則(左)/大嶋 大(右)

経営理念

私たちには社会基盤の整備という
誇りある仕事を通じ
常に信頼と共感を得られる企業として
お客様と共に
人生の喜びや感動を創造する

私たちのCSRとは、経営理念の実践そのものであり、社会とお客様から信頼と共感を得られる企業を目指します。

1. 地域社会との調和
2. 建設産業の発展に貢献
3. 法令遵守と透明性の高い経営
4. 組織と人を成長させる
5. 総力経営で現場最適を実現

トップメッセージ

育てる力を現場の力へ、そして未来の力へ



代表取締役社長
遠藤 和彦

日本は今、時代の大きな転換点に立っています。右肩上がりに続いてきた日本型成長システムが崩壊し、景気低迷と少子高齢化による国力減退が進む中、2011年3月には東日本大震災が発生しました。しかし、そんな苦境の時代にあっても、日本は先進国家として安定した社会を維持し、人の暮らしや経済活動がしっかりと守られ、海外から高く評価されています。

その背景となる高度な都市機能の形成や交通網・インフラ整備など、このゆるぎない社会基盤を創り育て、支え続けてきたのは、私たち建設産業だと確信しております。そして、その現場を支えてきたのは、持ち前の技術と技能を存分に発揮する「職人の力」であり、その職人を束ねる「組織の力」です。しかしながら、近年、少子高齢化と熟練技能者の離職に歯止めがかからず、多くの建設現場で職人不足が深刻な問題に発展し、工期の遅延や生産性の悪化を招くなど、建設産業の基盤とも言える技術・技能の伝承そのものが危ぶまれる現状にあります。向井建設は、専門工事業のリーディングカンパニーとして、この産業界全体の課題克服に貢献すべく総力を挙げて、人を獲得し、人を育て、人の技を高め、人を束ね、人と協調し、人の期待に応えて参ります。そして、日本の未来を創る力であり続けます。

向井建設の若者たちが現場をリードする



息子に自慢できる誇りある仕事

私はとび職人として今年で13年目を迎えます。最初に携わった現場は、西新宿にある30階建マンションでした。当時は、高所恐怖症だったので怖いながらも、先輩たちの背中を見ながら、無我夢中で仕事をしていました。今では職長会の会長として、他職も含め500人を束ねる日々を送っています。

建設の仕事の魅力は“かたち”に残る仕事です。今施工している読売新聞本社ビルは、歴史にも残る建造物になることを考えると、とても誇りを感じます。息子が大きくなったら「自分が建てたビル」として自慢したいです。

建築直轄施工部・田中班 加来大輔(とび職長)・2000年入社

笑顔の絶えない明るい現場を創る

私は、入社3年目に『北海道新幹線奥内高架橋』という大きな現場を任されました。現場が始まった当初は、今までの規模とは違い不安でしたが、会社の上司をはじめ、各職長、作業員の方々が私を温かく支えてくれました。それが良い意味で私のプレッシャーになり、現場作業の為に優先すべきことは何か、何をしなければいけないかということを常に頭に置く事で、責任を感じ、現場を動かすことができたのだと思います。

ここで学んだことは私の大きな糧となっています。『笑顔の絶えない明るい現場創り』、これが私のモットーです。この先も色々な現場に就くと思いますが、辛い時はいつもこのモットーを胸に頑張って行きたいと思います。

東北支店・土木部 藤本陽介(現場代理人)・2008年入社



仲間の期待に応えていく

私は型枠工として、もっとも大事な図面を読む力と、それを加工していく技術研鑽を日々重ねながら立派な職人になろうとしています。先輩と仕事をしていて施工の進め方や手配の仕方を勉強できるのも楽しみの一つです。より複雑な工程や施工を消化し、関係者から良い評価を頂いたり、元請から慰労やお礼の言葉を掛けられると苦労を忘れてしまいます。そして、何よりも元請に「今度も頼むよ。」と言われる事が一番のやりがいです。これから経験を積み、仲間や同業者に評価される「職長」を目指し、更には複数グループを統括する現場リーダーになりたいと思います。

土木直轄施工部 江端久幸(型枠工)・2003年入社



お客様から頼られる喜びを大事に

自分で考えながら施工計画を立案し、完成型をイメージしながら、見ため・見やすさ・わかりやすさ、お客様に満足していただけるかを考え図面に表現しています。お客様に「ありがとう、またお願ひ。」と言われたり、同じお客様から何度も指名で仕事を依頼されると、やりがいを感じます。サポート部門の一員として、現場で働く方々に対して、頼られる存在になり、リピーター顧客をもっと増やしたいと日々思っています。

技術管理部 浦辺麻生(CADオペレーター)・2006年入社



歴史が培った人づくり

優秀な技術・技能の育成

職人から棒芯、そして親方へ

一昔前、建設現場には、必ず棒芯(心)と呼ばれる腕の良い職人がいました。棒芯は経験・勘・度胸、そして統率力を備え、あらゆる面で中心的存在でした。職人徒弟制度の時代、新人はすぐには、仕事をさせて貰えず、道具や丸太の運搬など手元作業から始まります。また仕事を教えてくれるというようなことはなく、「盗んで覚えよ。」と言われながら職人として心と技を磨きました。

優秀な職人であれば、兄貴分や親方から認められ、長への道を歩み始めます。高度な技の研究・習得、人を使うコツを覚え、後輩から慕われるようになり、ようやく棒芯として現場を仕切ることを任されるのです。「小頭」と染め抜いた組の半纏を貰うと「一人前」。自分の仕事にプライドを持ち、事故や手抜きは恥だと考えていました。そのうちに稼業の道の社交術も身につけ、小頭、そして頭として昇っていくうちに、相当な収入を得ることもできました。



昭和5年横浜出張所前にて(中央は初代社長向井徳次郎)

頭は世話役とも呼ばれ、大工事を担うのは自他共に認める大世話役でした。向井建設において、世話役が工事長という名称となつたのは昭和35、6年頃です。

日本初の超高層ビル、36階建の霞ヶ関ビルが昭和43年に竣工したのを契機に、続々と都心に超高層ビルが建設され、サブコンにも先進技術に対応できる優秀な技術技能者が求められるようになりました。現場施工や作業員の確保及び教育を、工事長に一任していた向井建設も、時代のニーズに対応した人材育成システムへの改革が、経営の重要な課題の一つになったのです。



高卒技能系社員の採用開始から34年

昭和53年本社に人事課が創設され、高卒社員の採用のために日本全国の工業系高校を訪問し、昭和56年、建築・土木工事を紹介するPRビデオ「建設業と躯体工事」を250校に配布するなどの努力が実を結び、25名だった採用人数は、昭和57年には61名になり、現在に至るまで安定した採用が可能になっています。4月に入社した新入社員は、大卒・高卒の隔てなく2~3ヶ月の研修後、建築・土木の現場に配属され、高い能力を身につけるべく研鑽を積んでいます。



平成元年4月旧本社前の新入社員。翌年から新ユニフォームに一新

「とびの向井」を伝承する精銳部隊

昭和59年から高い技能力を保持した社員薦の育成を開始し、昭和63年にはPTグループが結成されました。

(PTとは、Picked Troops「精銳部隊」の略称) 育成開始から既に30年近く経ち、続々と職長クラスを輩出しています。現在では、超高層鉄骨建て方工事の特命を受けるほどのグループ群にまで成長しており、長年の取り組みが、確実に実を結んでいます。



PTグループによる鉄骨建て方

建設マンの心を育む技士の館

120の個室、研修施設や講師室、ゲストルームが設けられた独立寮「技士の館」が、平成4年12月に完成しました。平成5年4月に東京都認定職業訓練校「建設技師トレーニングセンター」を開校し、とび科、鉄筋コンクリート施工科など系統的なスペシャリスト養成カリキュラムを組み、訓練を開始しました。実技訓練は、茨城県稻敷市にある大利根機材センターで行われました。現在は、向井敏雄会長が職業訓練法人富士教育訓練センターの設立に強く関与した関係で、平成9年4月から富士山が見守る富士教育訓練センターで、新入社員教育が行われています。



平成4年竣工の独身寮
「技士の館」



2012年新入社員教育

4月

- 安全衛生教育
- 材料・工具使用法指導
- 総合訓練施設設営
- 高所歩行
- 足場板結束訓練
- 仮設実習
- 玉掛け技能講習
- 応用力学の学習
- 仮設図製図講習
- アーク溶接特別教育など

5月

- フォークリフト
- 高所作業車運転技能講習
- 科目別実習の開始
- 鳶基礎科・建築関連実践型
- 鉄骨建方実習
- 仮設工事実習
- 土木科
- 測量実習
- 総合建設実習
- 低圧電気取扱い講習など
- 土木系型枠
- 測量実習
- 型枠工事実習
- クレーン運転講習など

6月11日迄

土木系は現場管理実習後修了
建築系は鉄骨建て方実習後修了
建築関連実践型は9月30日迄OJT



若手社員を見守る専任カウンセラー制度

2012年4月、女性1名の施工管理社員を含む24名の新入社員は入社式を終えると、すぐに静岡県にある富士教育訓練センターへ向かい、鳶基礎科、土木科、型枠科、建築関連実践型に分かれて約2ヶ月半の研修を開始します。職長クラスの社員を講師として、建設用語をはじめ、10種類以上の技能資格取得、本格的な鉄骨建方、建て込んだ型枠にコンクリートを打ち込むなど、現場を意識した実践的な訓練が行われています。建築関連実践型コースは、ここでの研修期間終了後も、更に現場での実地訓練を継続し、その後に配属しています。

訓練期間中は産業衛生課(P.12参照)の専任カウンセラーが寝食を共にする中で、お互いの信頼関係を築き、「やり甲斐、生き甲斐、入社した動機」など様々な疑問や将来設計に答えるカウンセリングを行います。訓練中に、建設業界で働く意義など、今後の企業人としての人生の礎を作り上げることを配慮しています。

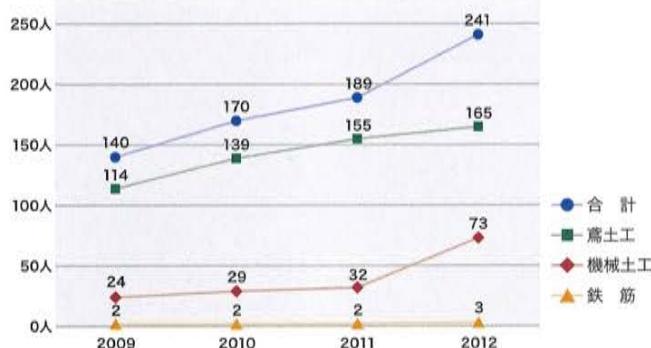


富士教育訓練センターの新入社員たち

現場の要 登録基幹技能者の育成を強化

現場をまとめ、効率的に作業を進めるマネジメント力を持った技能者の育成を目指し、登録基幹技能者の資格取得にも力を入れてきました。現在、165名が登録鳶土工基幹技能者を、73名が登録機械土工基幹技能者の資格を保有しています。基幹技能者制度推進協議会の会長を務める向井敏雄会長は、広く建設業界で活用されるべく、登録基幹技能者制度の普及に向けて尽力しています。

当社登録基幹技能者累計推移(専属協力会社を含む)



技術・技能の伝承は私たちの使命

技の競い合い 日頃の仲間がライバル

継続することで醸成される「向井魂」
第12回技能オリンピック開催



いかに工業化、機械化が進んでも、建設産業における施工の要は現場を知り尽くし、高度な技術・技能を発揮する「人の力」です。それは、日々の現場作業を通じて、先輩から教えられ、チームの中で切磋琢磨し、少しずつ積み重ねて体得されるものです。

向井建設では、技術技能の伝承、安全意識の高揚、資格取得の準備と参加者の技能レベルの再確認のために、技能オリンピックを毎年開催しています。2000年の第1回以来、東京職長会と共同主催し、応援者、会社関係者を含め400名近くが参加し、100名以上の選手が正確性と安全、そしてタイム等の審査項目により、技を競い合ってきました。

2012年10月14日、三郷市サンケイスポーツセンターにおいて、第12回技能オリンピックが開催されました。選手117名が取り組む競技内容は、1級競技「真づか小屋」組立、2級競技「片流れ小屋」組立、仮囲い「フラットパネル」組立、コロ曳き、玉掛け競技の5種目です。

参加者にとり、卓越した技を見る絶好の機会になっています。

向井建設 技能オリンピック
個人のレベル再確認
社会的地位向上図る

片流れ小屋に挑戦

2000年9月 第1回技能オリンピック開催

建設通信新聞 10月16日号



2000年9月第1回技能オリンピック開催

今年も技能五輪全国大会で上位入賞

日本一に挑む若者たち

技能五輪全国大会は、様々な職業における23歳以下の青年技能者を対象とし、年1回秋に行われています。向井建設は、初めてとび種目が加わった2009年、47回大会から本社建築部の若い社員鳴を選抜し参加してきました。

2009年敢闘賞、2010年には金賞、2011年に金賞・銀賞とトップ独占。2012年は敢闘賞を受賞し、4年連続上位入賞を果たしています。



第50回技能五輪全国大会
総合ガイドブック



直轄施工部・田中班 松川広大が敢闘賞を獲得(2012年)

毎年チャレンジしているのは20歳から21歳の社員鳴たち。腕が良く根性があり、目的意識の高い者が選ばれ、超一級の技の伝承者、国重徳美指導員(第1回建設マスター)の厳しい指導のもと、練習に励みます。何事も同じですが、段取りなどのイメージトレーニングを繰り返し、先々の手順を考えながら行動すること、また作業終了後の再確認をすることなど、技能五輪に向けた訓練を通して、技士としての心得を教わることは、一生の財産となります。2012年10月27日、長野県諏訪湖を望むイベント広場の会場で、会社を代表する3名が力闘を繰り広げました。今回敢闘賞を獲得した松川広大は入社2年余の20歳。仕事の合間に社員寮でもある技士の館を練習場として猛特訓を重ね、今回の大会に挑みました。「やるだけの事はやった。自己採点は70点くらい」と厳しい自己評価。若者達が参加するこの挑戦が、良い刺激になり、ステップアップすることが期待されます。

100年培った技の伝承者が次世代を育てる

本支店に勤務する先輩たちが技術・技能を支え、次世代への技術技能の伝承を担っています。

毎年の挑戦者に、厳しく教える労務安全部の国重指導員は、技能五輪全国大会上位入賞の陰の立て役者です。既に現役を退いていますが、頭と腕にしみこんだ技術・技能レベルでは誰にも負けません。



技の伝承者 国重徳美指導員
横浜ランドマークタワー 1992年

工業高校の実習をサポートする

工業高校の技術指導に貢献



企業技術者による 足場組立講習会

千葉県旭市東総工業高校建設科の生徒に 専門工事業の技を指導する



東総工業高校は、創立50周年を迎え、「ものづくりは人づくり、国づくり」を教育理念に、コンピューター教育の盛んな学校として知られ、建設科もインターンシップ制度を取り入れるなど、実技習得に積極的な姿勢を持つ。

在学中の資格取得に積極的な千葉県立東総工業高等学校では、3級とび技能士検定の課題実習を行っています。本職の薦からの指導を希望し、富士教育訓練センターから推薦された向井建設が講師として社員を派遣、実技指導に協力することになりました。

当社では、工業高校での実務教育の重要性と将来の建設業を担う人材に建設業、特に専門工事業への理解を深めてもらう活動を進めており、同校の教育方針と一致したのです。

平成24年2月10日、17日の2回にわたって行われた「企業技術者による足場組立講習会」には、建設科建築コース・土木コースより36名の生徒が参加し、当社社員たちが3級とび技能士試験課題を指導しました。雪の舞う野外での指導にもかかわらず、番線を器用に操り足場板を結束するなど、技の習得に熱意を見せっていました。学校側からの要望で、2013年にも指導を行う予定であり、社会貢献の一環として積極的に対応していきます。

生徒たちの声

『足場の組立ての実習を通して人との関わり合いの大切さを学んだ。やってみて建築の仕事は頭を使うことがわかった。』『講習会で道具の名前、作業の手順、番線の締め方のコツなどを、とてもわかりやすく説明してもらい、足場組立もやりたい仕事なので、将来役に立ちそうです。』



正しいクランプの締め方指導



正確な足場組み立て指導

工業高校へ足場一式贈呈

2007年から学校訪問を行っている 長崎県立鹿町工業高校へ、最新式教材を贈呈



「われ共に学び 道を究めん」
創立50周年を迎えた長崎県佐世保市にある県立鹿町工業高等学校の校舎。
心身ともに健康で、広い視野と豊かな人間性を持ち、想像力あふれる実践的産業技術人を育成するという教育目標を掲げている。

全国的に工業高校の土木科が廃止される傾向にある中、2006年鹿町工業高校は土木技術科を新設しました。そのカリキュラムをつくる際に、富士教育訓練センターで触れた当社の訓練教材が参考になったと聞いています。

2007年から向井建設は学校訪問を行っており、卒業生7名が入社しています。『将来の建設業を担う、熱い気持ちを持った優秀な技術者を育成指導する。』という姿勢に共感した向井敏雄会長は、同校で講話などを行い、建設業の魅力や社会的責任を伝えてきました。

7月の訪問時に、最新式の実習用足場を整備する予算が無く、更新ができない実情を土木技術科主任教諭から聞き、当社他3社の協力の下に、手摺り先行型足場システム一式を教材として提供することになりました。

9月4日に贈呈式があり、出席した向井会長が「皆さんに、良い環境で学んで欲しいという想いから、寄贈させて頂いた。建設業に入職し、大いなる活躍を期待している。社会に出る前にしっかり勉強し、技術力を高めてほしい。」と激励しました。土木技術科の3年生たちは、新品の足場材に緊張しつつ、職人の指導を受け足場を組み立てました。



贈呈式で挨拶する向井敏雄会長



指導を受けながら足場組立てをする生徒たち

『学校で学んだことを、現場で活かす』

土木部工事一課 片山恵俊

2010年3月鹿町工業高校を卒業して、向井建設に入社してから3年目を迎えようとしています。土木工事の施工管理者として、『道を究めん』が為に日々頑張っています。



学校で学んだ基礎知識は、現場で働く上で役に立つことが多い

ます。例えば材料の置き方や測量機器の設置はその一例です。自分は構造力学と数学が苦手でしたが、現場で施工をする上で、大変重要なという事を実践で理解しました。「勉強はやれる時にした方が良い。将来きっと役に立つ。」この言葉を先輩として後輩達に贈ります。今回、寄贈して頂いた足場材は、在学中に学べる知識の幅を広げるものであり、しっかり基礎を修得してもらいたいと思います。

日本の技術・技能力を海外へ

海外技能者研修…国際貢献から現地法人で働く人材育成へ



向井敏雄会長

躯体技能者育成でベトナムとの架け橋となる

1989年以来、中国、ベトナムから海外技術・技能実習生の受け入れ事業をしてきました。国際貢献、民間外交という意義もあり、17年間、13期にわたり88名の研修生を教育指導しました。

相手先が選抜した研修生を、衣食住に配慮しつつ、スキルアップを図り、自国の建設業界で活躍する人

材として帰国させましたが、総括するとボランティア的な側面がある企業活動でした。

近年、日本の国家戦略、また「建設産業の再生と発展のための方策2011」にあるように、建設産業の海外工事受注の拡大という方策が打ち出されており、インフラ整備が活発な発展途上国において、日本の建設関連企業が様々なプロジェクトに参画しています。当社もドバイやベトナムで建築・土木の管理社員や施工グループの派遣を求めてきました。その中でも注目すべきは、ベトナムですが、2005年、2008年に社員を派遣した経験から、現地の技術・技能者不足を強く感じました。ベトナム人技能者の育成に協力してほしい、とのゼネコンからの要請があり、技能実習生の受け入れについて検討を始めました。

まず、日本のゼネコンの現地関係者から施工事情のヒヤリングを行いました。海外工事では様々なリスクを負っていますが、特に人材面では、●プロジェクト毎に、地元の協力会社、技能者の集散を繰り返し、技術・技能者の質が一定に確保できない。●労務の質が一定でないため、歩掛りがつかみにくく、原価管理が難しい。●請負という形態や意識が無いため、実費精算で赤字を出す。●ゼネコンの職員自体が、現地の作業員を効率的に働かせることができないため、作業ロスが発生する、などの課題が挙げられました。円滑な施工には、日本並の技術・技能レベルを持つベトナム人のエンジニア、フォアマン、ワーカーを育てる必要性があります。



訓練方法ですが、日本機械土工協会の活動の関係などで、ベトナムの大手派遣会社ニベルコの経営者に人脈があり、そこが運営する国際職業訓練校の一部で事前教育を行うことになりました。ハノイから85kmのニンビン市にあるインターナショナル・ヴォケーション・スクールは、校舎・寮を備えた立派な施設です。

ベトナム人の識字率は96%と高く、勤勉で真面目、手先が器用なうえ上昇志向が顕著であり、技術技能の伝承には欠かせない要素を備えています。現場で必要な数学ができること、技術技能経験5年以上、23歳以上40歳までの人の募集し、数学、一般教養、築・型枠・鉄筋の技能試験を実施しました。2012年2月選抜された7名を1期生として開校式が行われました。4ヶ月の事前研修の後に、日本での実習、訓練が順調に行われています。

人材育成の状況をみながら、2、3年のうちにハノイに現地法人を立ち上げ、実習生を雇用し、ワーカー、フォアマンとしてベトナムの建設現場で働くよう体制を整備していく予定です。

第一ステップとして2009年からベトナム人を3年間技能研修

向井建設がベトナムにおいて躯体工事を受注するには、現地技術者・技能レベルの向上は必須課題です。そうした人材を育成するという会社方針の下、2009年10月現地で選抜したベトナム研修生10名が来日しました。富士教育訓練センターで、日本語や施工の基礎を学び、現場に配属されて3年間の型枠組立作業や鳶作業に取り組みました。ベトナム人の国民性から皆非常に真面目で、施工の仕組みや段取りなどひたむきに向き合い、とび基礎二級または型枠基礎二級を取得、玉掛け技能講習と高所作業車講習の資格を取るなど、確実に力を付けていきました。



型枠の建て込み練習を行うベトナム技能実習生

型枠工として一人前になるように

土木直轄施工部長 当麻公明

2009年来日したベトナム人研修生10名のうち4名が土木部に配属されたのは2012年4月。日本語の会話も支障なく交わせ、筆記能力は日報、出勤簿、技能実習報告書を書ける程になっていました。加工帳を見ながら、基本的な建て込みや、セバ通しができるよ



2009年来日したベトナム研修生

うになりました。元請から日本語での意思疎通や技能レベルで不安を示されますが、1日目から向井建設の指導員と共に、真面目に仕事に取り組む様子に納得され、高評価を得ていましたが、3年間という期限があるため惜しまれて帰国しました。

9月1日来日した1期生7名は、6ヶ月間十分な語学学習を現地で行っており、6名が既に土木部の現場に配置され、実習経験を積んでいます。これから2期生、3期生が続々と来日するので、今後立ち上げる現地法人でフォアマンとして働けるように、技能力向上に気を配っています。



2012年10月向井会長が出席し、2期生の修了式と3期生の入校式が行われた。

ベトナム・ニンビン市での職業訓練

本社にベトナム事業推進室を新設



訓練にあたる指導員たち

ベトナムでの施工や学校運営、教育・指導に当たる専門部署、「ベトナム事業推進室」が2012年10月新設されました。この事業は、現地での専門工事の施工に欠かせない優秀なベトナム人エンジニア・技能者を育成し、今後飛躍的に発展するベトナム国内のインフラ構築に寄与するという高い視点にたっています。2012年10月から施工管理者育成の講師として、課長の富崎信介がニンビン市の学校に赴任しました。既に62名の研修生指導に当たっている3名の指導員と共に成果を上げています。現地法人の設立を目指して、向井会長の強力なリーダーシップのもと着実に計画が進んでいます。

技術・技能だけでなく、心のケアも

ベトナム事業推進室課長 富崎信介

2012年10月から研修指導のリーダーとしてニンビン市インター・ナショナル・ウォーキングスクールに赴任しました。この訓練校は、現地でも評判が良く、メディアでも取り上げられています。

私の責務は現地で指導を担当している阿部健一社員(鉄筋)、佐藤敏之職長(とび)、高橋稔職長(型枠)のまとめ役、そして日本に赴くベトナム研修生に、日本の建設現場のシステムと躯体工事の技能と施工管理指導を行うことです。

日本では、鳶や型枠などの技能研修についてベトナム人に指導したことはありますが、施工管理者育成は初めての経験であり、水準が異なる施工管理を理解してもらうのは、なかなか苦労があります。2013年3月までの6ヶ月という限られた期間で、精一杯研修生の力になれるよう頑張っています。ベトナム現地でゼネコン社員として経験が長かった大串宗太指導員がベトナム語を解せるので、技術・技能面での研修は順調に運んでいます。

どうしても「言葉の壁」があるために、難しい日本語を教えるのを覚えるのも、双方にとり精神的に負担があります。研修生にやる気持ちを持ち続けてもらえるよう心のケアにも配慮しながら、そして、現地における学習が日本での成果に結びつくよう、4人の指導員と力を合わせていきます。



1期生7名 日本で研修中

2012年9月1日、最初の卒業生である第1期ベトナム人技能実習生、精銳7名が成田空港に到着しました。指導にあたったのは、ベトナム人の指導で先駆的な役割を果たした宮沢典雅職長の他、1月にベトナムに帰国したジャン・ヴァン・ヒエウです。彼は日本での2年余の実習経験を活かして、ベトナム人らしい視点で研修を助けてくれました。

宮沢職長が1月から始めた研修に当たり、まず直面したのは生活や習慣の違い、言葉の問題です。4ヶ月のうちにレベルに達しない、規律・規則を守らない、呑み込みが悪い研修生は最終試験でふるい落とされます。最初は厳しく、甘えないように、レベルが上がってきたら思いやりを持って接するよう心がけました。

宮沢職長が6ヶ月の研修期間中に感動したことは、研修生のハングリー精神、目の輝きです。家族のため、日本に行って高い技能を身につけ、生活レベルをあげたいという熱い情熱を持って、一生懸命ひたむきに努力する姿に、教える側も熱が入りました。来日後、技士の館に居住しながら、現場で3年間の実習に取り組んでいます。



型枠建て込み指導に当たる宮沢職長



校舎の前で 指導員と研修生



鉄筋組立て指導



型枠指導のヴァン・ヒエウ講師補助

「日本に行く！」という目標を持って研修に励む

2期生23名が10月修了式を終えて、来日準備中です。大工9名、鉄筋6名、鳶8名の研修生たちは、朝5時には教室に自主的に入り自習し、夕方5時30分迄の授業を熱心に受けた後は、寮に帰り11時まで勉強するという毎日を送るほど、向上心が高い者が揃っています。豊かな生活を目指し「日本に行く！」という目標を強く持っています。

日本人と常識が異なるために、時間や約束事を守るという基本から厳しく教えねばなりません。1期生研修の経験を踏まえて、指導員たちは、独自に工夫した会話や用語を記したハンディタイプの手引きなどを作成し、早期の習得を手助けしています。

2期生の修了式が3期生の入校式でした。3期生募集では新聞雑誌、TV媒体などメディアを通じて募集したところ、399名の応募があり、書類選考・健康診断・体力テストで127名に絞り込み、その後試験を行って、とび20名、型枠20名、鉄筋20名、エンジニア6名を選び、66名が研修中です。11月から2009年研修生ファム・ヴァン・タンが鉄筋の講師補助となり、研修生とのバイブル役になっています。

東日本大震災を乗り越えて、安心なふるさとに

宮城県多賀城市のがれき処理に挑む

16万トンを処理し 地域再生に第一歩

東北支店 土木部長 成田 広

新設の土木構造物を得意とする東北支店土木部では、復興の課題である大量のがれき処理に取り組み、大きな成果をあげています。

2012年2月からはじめた多賀城市のがれきを、土砂、木材、鉄などに選別する仕事は、初めての経験で当初、重機の損傷等様々な不具合が

発生しました。その場で改善策を考え、現場で試験施工や処理プラント機械運転者の教育などを行うことで、作業員の生産性が向上し、その後順調に進みました。労務状況が逼迫する中、全盛期には約60人以上を東北6県だけではなく、東京や北海道からも応援をもらい、工期内に処理を完了することができました。11月末には多賀城市以外の受け入れ処理として、七ヶ浜地区のがれき処理に取り組んでおります。



がれき粗選別



がれき選別ヤード

誇りを持って南三陸町復興のために



次はここだ！ 南三陸処理区 処理量54万t

多賀城市での処理の実績や経験が、南三陸町の災害廃棄物処理に活かされています。広域かつ膨大な量を処理するために、6月からプラント造りに着手、9月からがれき処理をはじめ2013年9月末に完了予定で、昼夜2交代170名体制で対応しています。地域の活性化と被災者雇用を大前提に、地元の方を50名直接雇用し、必要な物資も地元優先で調達して作業を進めています。震災の爪あとが未だに残る地域にもかかわらず、地元の方々が笑顔を絶やさず、ひたむきに作業に従事してくれていることは、当社の管理者、工事関係者の励みになっています。南三陸町の復興に携われる事に感謝し、誇りをもって地域の復興の為に作業を進めています。



がれき手選別

福島原子力発電所関連工事を遂行



Jビレッジに集合した従事者



円形タンクの積み替え作業

3.11直後から向井建設では、福島第一・第二原子力発電所事故対応に、本支店を挙げて取り組んできました。2011年6月にいわき出張所を設け、災害復旧に関連したがれき撤去や新たな施設の建設、護岸工事、除染作業に至るまで本支店社員、福島営業所工事長、協力会社の作業員達が懸命に働いています。2011年7月から始まった1号機の建屋建設には、関連会社である稻田組（北海道札幌市）の鳩たちまで現地入りし、頑張ってくれました。これから本格化する4号機のカバー・リングでは、防護服を着用した困難な鉄骨建方や仮設工事が続きます。2013年4月まで元請の指揮の下、安全第一に施工を進めています。

その他遮蔽容器キャスク置場の躯体工事、警戒区域内での大熊給油所運営と鋼製円形タンクの荷積替、福島第二原発での保安資機材の荷降ろし集荷作業など多岐にわたります。常に放射線量が問題であり、真夏では防護服を着ていると4時間しか働けない、運搬車両は移動毎に汚染洗浄を行なうなど、効率が悪く、工程通りに実施するのが困難という特殊事情がありますが、総力を挙げて現地の安全を取り戻していきます。

警戒区域内の除染を行い住民帰還へ

除染作業も当社担当の大変な仕事です。2011年12月から開始し1年以上が経過しました。除染特別区域の福島県田村市の2工区において、まず山野・農地・宅地の草刈や除草、堆積物の除染、各農地の地質調査後の深耕除染を実施。その後、建物に取り掛かりましたが、実証実験の結果から先行除染、本格除染とステップを踏まねばなりません。住宅でも足場を組み、作業員が屋根・壁・雨樋をタオルにより拭き取り、敷地内土間のスキ取り、各箇所の覆土など地味で手間と時間がかかる作業です。

2013年3月まで降雪状況を見ながら着実に除染し、地域住民の一日も早い帰還の助けになればと頑張っています。



除草・除染作業



屋根拭き取り作業

宮城営業所気仙沼出張所開設

2012年3月、三陸沿岸地域の復興工事に迅速に対応するべく、気仙沼出張所が開設され、山崎武所長が赴任しました。臨海部が壊滅的被害を受けたため、産業都市再生が使命であり、復興が急がれています。既に気仙沼の水産加工施設、製氷冷蔵施設を竣工し、続いて大船渡などの工事に取り組んでいます。地元協力業者と力を合わせ『人と絆』を大切に、一日も早い三陸沿岸部の復興再生を目指します。



再生の先駆けとなる
製氷冷蔵施設建設

震災の教訓をBCPに活かす

記憶を風化させず後世に役立てる震災記録誌刊行



地域の危機に遭遇して復旧に燃えた 建設マンたちの相互信頼と絆の強さを実感

『その時私たちは』から抜粋した社員たちの想い

- 沢山の人との信頼関係と協力があったから乗り越えられた。
そして、自分を突き動かしたものは、使命感と責任感である。
- 建設人として自分たちの暮らす街の被害をじっとみていられなかつた。
- 英雄視されることなく、裏方に徹する建設業。その活躍は誇り高いものを感じる。
- 生きていることに感謝して…「俺たちがやらなければいけない。」という使命感が、胸の奥から湧いてきた。
- 「俺がやらなきゃ誰がやる。」仲間と一緒にになってなし遂げた復旧工事、あの時の思いを胸に、誇りを持って復興へ
- 一緒に作業した職人たちは、難しい現場ほど燃えるタイプばかり、士気は高かった。
- 「避難所への炊き出し」少しでも被災者の方の役に立ちたい。
温かな汁を飲んでいる皆さんの笑顔が自分自身の喜びになった。
- 自然の力の恐ろしさを感じた。しかし、人間の力はもっとすごいと信じたい。

編集を担当して改めて思う、 建設業の素晴らしい力を

経営企画部 伊坂匡史

2011年6月、ある会議の席上で、向井敏雄会長の「東日本大震災での当社の対応を後世に残したい」との発言をきっかけに、本社・東北支店の社員たちにインタビューし、まとめる仕事を、本社経営企画部の私が担当することになりました。

取材が進むにつれ、経験した事のない大地震に襲われ、不安を抱える人、東京から送った支援物資に感謝する人、家族への心配を抑え復旧に向かう人、想像を超える事態に即断即決を迫られ、その重責に押しつぶされそうになりながら懸命にリーダーシップを示し続けた人、地元東北に貢献したいという人…普段触ることのできない「人の力」の大きさが、そこに見えました。「この活動を時間の経過の中に埋もれさせてはいけない」という気持ちで懸命に編集を取り組みました。

『その時私たちは』と題されたこの本の背後には、載せきれなかつた多くの社員や関係者の、数々の感動的な活躍がある事を忘れてはならないと感じています。

業界関係者の方々はもとより、これから入社する社員、そして建設業との関わりの薄い方々に、いかに建設業が社会基盤を支える誇り高い産業であり、高度な技術と高い志を持ちながら、特段目立つことなく、ひたむきに働いている人々が沢山いる事を、理解して頂きたいと深く念じております。

震災から1年「東日本大震災・鎮魂から再生へ」開催

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、未曾有の被害をもたらしました。

向井建設はいち早く復旧工事に対応し、震災直後から昼夜問わず作業に取り組みました。時が経つにつれて、いつ終わるともわからない膨大な作業に、フルパワーで取り組んできた社員たちに疲労感が見え始めました。

仕切り直して、今後も長い長い復興活動に携わる、当社のこの1年の活動を振り返り、新たな活力をバネに、前へ進むための共通認識を持つ時期が必要であるという判断の下、「東日本大震災・鎮魂から再生へ」という式典を本社と東北支店でそれぞれ開催しました。



社員の労をねぎらい、大震災で被災された多くの犠牲者の方々に対し追悼の念を表す、震災記録誌「その時 私たちは」の出版記念、企業の社会的責任として東日本再生に向けた貢献への誓いという様々な主旨で、総勢400名余が参加した集いは、2月29日東京本社で、3月7日東北支店で行われました。

出席者は、災害発生直後から会社挙げて復旧に取り組んできた活動の詳細発表をスクリーンで見ながら、雄々しく立ち向かった仲間たちの姿に感動し、連帯感と絆を深めました。

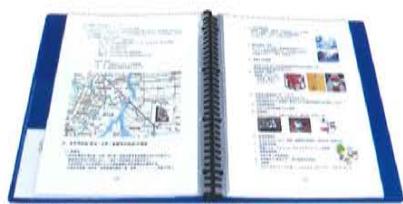
「我々は誇りある仕事をしている」という使命感を共有し、新たな挑戦に向かう全社員の心が一つになったことを実感できる好機となりました。

震災後BCP活動の見直し マニュアルの全面改定とビジュアル化

2006年より始めたBCP活動は、訓練を繰り返し改定して、東日本大震災に遭遇しても、即時災害対策本部を立ち上げ、実効ある活動を展開することができました。しかしながら、ライフガイドの途絶や交通麻痺など、行動を阻害する想定外の困難に直面したのです。

今回の震災を受けて、この貴重な体験を基に、BCPの見直しを図りました。社員の実体験や各部門から集まった80件にも及ぶ問題・課題に対して対策を立案し、全社員に周知を図る為、災害対策基本マニュアルの全面改定を行いました。文章だけでなく、挿絵や写真、地図や図面を多く取り入れ、緊急時にも即時に理解できるよう視覚に訴えるものに変更しました。

2012年5月、本社第9回総合震災訓練では、マニュアルの読み合わせを行い、周知を図りました。



災害対策基本マニュアル改定版

全社一丸経営を目指し 「創造性と主体性」をもって業務の抜本的革新を実現

向井を支える社員のエンパワーメントを結集



方針発表する遠藤和彦社長

第63期方針を本社キックオフミーティングで発表

2012年9月30日東京本社管轄の第63期キックオフミーティングがロイヤルパークホテルで開催されました。今回は、日頃会社の経営方針に触れる機会が少ない現場で働く社員にも、会社が進もうとしている方向性を認識してもらうべく、日曜日に開催されました。

向井敏雄会長が業界環境と会社業績を説明し、遠藤和彦社長からは、第63期の経営方針として『一人ひとりが企業家魂を發揮し、創造性と主体性をもって業務の抜本的革新を実現する。』という経営姿勢が掲げられました。感動創造型企業の実現に向けて、全社員が「躍動感あふれるチームワーク」をもって、お客様のナンバーワンパートナーとして、期待を超える営業活動、実施工、技術支援を展開し、この激動の時代を勝ち抜いていかなければならないという決意が示されました。

次に各部門長の方針が発表され、BCPなどクロスファンクションアルチームの経過説明がありました。



遠藤社長から経営方針説明

16の経営課題に積極的挑戦

建築総括部長 向井隆晃



1991年以来激減している建設投資により建設業界には長年逆風が吹いていますが、向井建設がこれまで培った技術・技能を駆使し、パッケージ施工、卓越した鳶技能を活かした大型システム仮設、機械土工事の営業基盤強化などを推進していきます。

またスマートビジョンを促進する新現場支援システム、機械土工の営業支援強化などをはじめとした16の経営課題目標達成に向け、建築統括部門が一致団結し、お客様のベストパートナーとして邁進して参ります。

東北の復興に向け、社会的責任を遂行

東北支店キックオフミーティング

東北支店では2012年10月5日、支店6階会議室にて第63期キックオフミーティングが開催されました。

遠藤社長による経営方針の発表から始まり、草野支店長の東北支店経営方針、各部門長による単年度部門方針発表と、次々に今期の進むべき道筋が示されました。

東日本大震災から約1年半の間、最盛期には1日千人以上の労働者をもって顧客の要請に応えてきました。「顧客からの震災復旧工事の依頼は、一件たりとて断わらない。」とのトップ方針の下、支店・全協力会社が一丸となり、懸命に遂行した結果、新規顧客獲得という成果報告もありました。

共に復旧・復興を担ってきた絆とチームワークを再確認したキックオフミーティングでした。



東北支店キックオフミーティング 東北6県から社員が参加

第63期東北支店5つの基本戦略を遂行

1. 拡大する東北の建設状況を踏まえて、既存元請、地場元請・新規元請から受注獲得し、地域社会の基盤整備を担う。
2. 建築躯体・鉄筋・型枠工事施工力強化。
3. 主体性ある安全管理活動の展開。
4. コスト競争に打ち勝つコンプライアンスに適合する施工体制の確立。
5. 絶対安全・絶対品質を提供する従業員・協力業者への能力向上研修会、部門技術研修会の計画的開催、役割分担業務の実践率を向上させ、信頼度の高い施工を目指す。



東北支店 草野昭男支店長

専門工事業者を搖るがす問題への対応

社会保険未加入問題CFTの活動

未加入状況が常態化している業界風土

施主のコスト最優先方針が、元請から下請まで流れている。

複雑な重層構造を背景に法令遵守が形骸化している。

加入下請の保険負担は価格競争において不利になる。



給料の3割が法定福利費・保険料と言われる時代、請負単価が安い事業主の負担が貰えない。

若年層を中心に将来の年金受給に不信感がある。

保険加入より手取り賃金が多い方が良いと、天引きを嫌う職人もいる。

業界全体を搖るがす問題に総力挙げて対応

社会保険未加入者が多い建設業の実態改善に向け、国土交通省は、2012年7月から経営事項審査時の減点幅の拡大、11月から建設業許可・更新時の確認指導、施工体制台帳等の記載項目追加など下請指導に本腰を入れ始めました。

デフレ傾向の市場原理から、コスト最優先の発注者に応えるため、ゼネコンは下請の請負価格を低く抑えざるを得ない状況です。社会保険加入が厳格化されて法定福利費が別枠計上されても、工事金額の総額による価格競争となつた場合は、協力会社の負担増に直結し、賃金の減少にもつながります。体力のない下請は経営破綻が危惧されるため、業界の根幹に関わる大問題に発展しています。

向井建設は2012年7月からクロスファンクショナルチーム(CFT)による「社会保険加入促進対策」の活動を開始、改善策について検討を重ねています。

専属施工班、協力会社、職長会の代表に対し、社会保険加入促進に対する行政の動向を説明し、現状における問題点の洗い出しを行いました。今後行政、元請から公表される標準見積書に対し、適正な保険経費の別枠計上システムの整備を図り、法定福利費が工事費内で負担増とならないよう粘り強いアピールを実施していきます。協力会社を含めたグループ内の体制整備及び加入促進の実践計画の作成と労働者の社会保険番号データ管理システム構築の対応などを進めています。

雇用・労働環境を向上させるという経営方針から、若年労働者の確保と健全な業界構築のために、困難な課題に前向きに取り組んで参ります。



社会保険未加入問題対応CFT会議



リーダーは遠藤社長、
向井会長も参加

ワークライフバランスCFTの活動

心と体の調和を図り活き活き働く職場をつくる

建設業では独自の生産形態から、日々変わる工事の工程や施工管理、人員配置、厳しい実行予算の遂行、精算業務、工事関係書類作成業務に追われ、複雑な人間関係やスキルアップの努力など、持ち場立場での軽重はあるものの、心身両面で様々なストレスを抱えています。そしてIT機器の発達により業務は高度化し、メール交信や携帯電話での連絡など、時間を問わず即時に対応することが求められます。常時不安や悩み、長時間労働といったメンタルヘルス面での不調を感じるケースが増え、企業経営のリスク要因として見逃せない問題となっています。

向井建設では労働安全衛生面から、組織全体の心の健康レベルを引き上げ、企業の活性化や生産性の向上につなげるべく、積極的に社員の仕事と生活の調和を図るワークライフバランスのあり方と施策を検討するCFTが2012年4月組織され、現状実態アンケート調査を本支店全社員に実施、その結果から取り組むべき課題を洗い出し、具体策の検討を行いました。



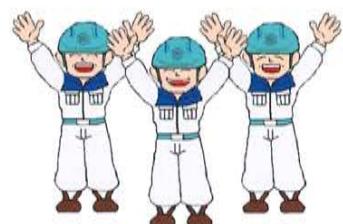
休日、夜間を問わない現場対応

ワークライフバランスの代表的な対策として

- 管理職は部下の作業環境・作業方法を観察し、コミュニケーションを緊密にすること。
- 緊急対応や突発的な顧客の要請に応えるために強いられる緊張状態・長時間労働からのストレスフリー時間の確保。
- 責任分担が難しい担当業務のフォローアップの仕組みづくり。
- 社内管理帳票の簡素化と手続きの簡略化を図る。

などです。

さらに、脳科学的に「笑う事」がストレス軽減に効果的として、10月の研鑽塾(個人能力向上選択型研修)において、「ストレス耐性向上研修」を開催し、ストレスを感じても、心身に蓄えず解消する方法を学びました。



産業衛生課新設とメンタルヘルスケア対応

職場におけるメンタルヘルス対応を行い、やりがいのある職場環境の醸成を図ると共に、精神面、技能面で未熟な新入社員の指導訓練に主体的に関わり、カウンセリングなどを実施し、早期退職防止と労働災害発生防止に努めることを目的として、10月新たに労務安全部に産業衛生課が新設されました。

職場環境、労働時間、仕事の量と質、職場の人間関係、パワーハラスメントなども観察し、早期の問題解決に向けて各部門と協力して対応していきます。



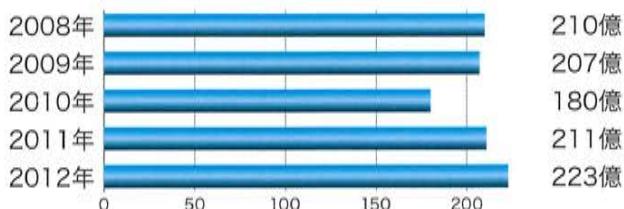
産業衛生課メンバー

常に成長を続ける企業として

会社概要

社名 向井建設株式会社
代表者 代表取締役会長 向井敏雄
本社 本社 東京都千代田区神田須田町2-8-1
支店 東北支店
営業所 横浜・東関東・北関東・名古屋・青森・秋田
岩手・山形・宮城・福島
いわき・気仙沼
出張所 明治41年8月1日
創業設立 昭和26年1月25日
資本金 100,000,000円
従業員 691名
事業内容 建築一式工事・土木一式工事
とび土工・コンクリート工事、型枠工事 他

売上高



組織図



グループ企業

向井総業(株) 東京都千代田区神田須田町2-8-1
(株)トータル・オフィス・ムカイ 東京都千代田区神田須田町2-8-1
エス・ティ・ムカイ(株) 東京都千代田区神田須田町2-8-1
MKエコプラント(株) 宮城県仙台市青葉区一番町2-5-17
(株)稻田組 北海道札幌市豊平区月寒中央通り3-1
目黒ターミナルビル(株) 東京都品川区北品川5-5-27-604

モチベーションを喚起し、新たな前進

企業名・所属・身分が分かる半纏

実用着、仕事着として法被(はっぴ)や半纏(はんてん)が、江戸時代18世紀頃から、丈夫なユニフォームとして庶民に広まってきました。職別により作り方、色も様々。店、組や集団といった仲間の識別、組織的精神性を象徴する背に所属が分かる「印半纏」は、誇りの象徴という面もありました。

社名・店名と頭、小頭などが書かれた襟文字と背文字により、身分、職種、階級は一目瞭然だったのです。

「形(なり)三分」の着こなしは腕の善し悪しを反映

明治から昭和30年代初めまでは、建設業界において半纏での作業は一般的であり、大工は勿論、野丁場の鳶は身ごなしや良い半纏を着て、ニッカと呼ばれるズボンに手甲脚絆、地下足袋で決めていました。

現場の花形的存在の鳶職の仕事の腕前は「形三分」と言われる着こなしで推測され、だらしない格好は職人としての心地の無さの表れでした。



初代徳次郎の世話役たち
昭和10年ごろ

向井三代の半纏

明治41年創業以来、向井組創業者向井徳次郎の一字を記した半纏が45年間着用され、赤が印象的な派手な半纏は現場でも目立ちました。棒芯以上になれば、年末に半纏の反物が支給され、各人は自分の寸法やこだわりで仕立てていました。最初の1枚を貰うことが技の証明。大世話役(現在の工事長)になれば、「善」「栄」「茂」「鐵」など自分の名の一文字を付けた半纏を作り「班」としての意識統一をしていました。

向井建設には初代徳次郎の「徳」の他、二代目市太郎の「市」、三代目向井敏雄の「敏」と三種の半纏があります。昭和30年代半ば頃にはユニフォームが一般的になり、安全上半纏を着る事は無くなりました。今では社内の式典、上棟や竣工式などに着て並ぶというように、儀式に使われています。



初代徳次郎



二代市太郎



三代敏雄



創業100周年記念式典での
東北支店工事長たち



上棟式でのPTグループ